学問を始めよう

ようこそ名古屋大学へ。名大はさまざまな分野で第一級の教授陣を数多く擁している世界レベルの研究大学です。あなたは、これらの教授陣を水先案内人として、学問・科学技術の世界に足を踏み入れようとしています。また、名大は膨大な蔵書・学術雑誌・データベース・実験設備を完備しています。これらをぜひあなたの学習に活用して下さい。

 本冊子の姉妹編『名古屋大学新入生のためのスタディティップス①－「学 識ある市民」をめざして』で紹介したように、大学は人類の知的遺産を保存・ 継承すると同時に、「新しい知」を発見・生み出す空間でもあります。そうした新しい知が創造される過程やその現場に立ち会う感動を、授業を通して教 員から垣間見ることができます。大学の授業は最高水準の知を継承し、そして生まれたばかりの新しい知に触れるところです。これって、すごいことだ と思いませんか。これからどうやって大学での学習を充実させていったらよいか、これから具体的なアイデアを紹介していきます。

大学の授業は高校までの授業といろいろな点で違いがあります。

第一に、高校までの授業は、学習指導要領に沿って教える内容がおよそ決められていましたが、大学の授業では、何をどのように教えるのかは、教授陣がすべて自由に決めることができます。いかなる政治的・宗教的・経済的な理由をもってしても、大学の教育・研究活動に圧力をかけることはできません。これを「学問の自由」（アカデミック・フリーダム）といいます。

三つ目は、できるだけ日常生活を維持するように心がけるということです。曽野綾子さんは、『贈られた眼の記録』という本の中で、「現実の病気がどうであろうと、人間の心を救う最大の要素は、日常生活の中にいられるということ」と書かれております。私はこれをとても大事にしております。他愛なく続く平凡な“日常”が一番ほっとして人の心を癒すもののようです。病気になり入院することによって、それまでの生活とは異なる非日常の世界で生活することを強いられます。特に、終末期の患者さんはそこで人生の最後の時間を過ごされることにもなります。

科学・技術はたえずパターナリズムに陥る危険性があります。パターナリズムとは、専門家がキミたちのことを考えてやってあげるから、素人は黙ってついてこい、という態度ですね。敗戦直後の日本では、こうした考え方が科学者の間に幅をきかせていました。

自然科学は最も有効な最も実力ある最も進歩せる学問である事は万人が認めるところである。かかる優れた学問を正しくつかみ正しく推し進めている自然科学者は最も能力ある人々でありこれらの人々の考え方は必ずや一般人を導くものでなければならぬ。

これを書いた武谷三男は、小林誠さんや益川敏英さんの先生に当たる坂田昌一とともに、戦前戦後の日本の原子核・素粒子論の研究をリードした物理学者です。戦前から、反ファシズムの立場で活動し、特別高等警察に検挙されても非転向を貫いた、尊敬すべき人です。

**[演習問題]**

（タイトル）研究者と文章

日本の置かれている現状を論じて、「格差社会」という言葉を流行語の最先端まで押し上げた本の一つに山田昌弘『希望格差社会』がある。僕は、この本からは学ぶものが大変多かった。それでも批判すべきところは批判しておくのが、むしろ礼儀というものだろう。

（引用：山田昌弘『希望格差社会』筑摩書房、2014年11月、p.150）つまり、強者の親が強者の子を育て、弱者の親は弱者の子を育てるという格差の再生産構造ができているのだ。（引用ここまで）

言いたいことはわかるが、文章がなんかヘンだ。

石原千秋『大学生の論文執筆法』ちくま新書、2006年6月、pp.55-56（一部改変）